

木屑錄

全

249
247

249-247



1200701769792

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

木屑錄

168

249
247

「木屑錄」解說
「木屑錄」譯文

小宮豐隆
湯淺廉孫



解説

『木屑録』は、漱石自身その表紙に書いてゐるやうに、明治二十二年九月九日に書き上げられたものである。明治二十二年の九月といへば、漱石が二十三年の年、さうして漱石が第一高等中學校の本科第一部の二年から三年になつたばかりの時であつた。漱石はこの年七月二十三日季兄とともに興津に赴き、八月二日に東京に歸つて來てゐる。同じく八月の七日には同窓の友四人と一緒に房總地方に出かけ、三十日に東京に歸つて來てゐる。その房總地方の旅の事を書いたものが、この『木屑録』である。

『木屑録』の跋を見ても分かるやうに、漱石は是を、書き放しに書いて行つて、出来上がつてから、一字も改める事がなかつた。勿論筆をとりあげるまでには、多少の時間が費されてゐるには違ひないが、然し筆をとつてからは、割に早い速度で滔滔と書きおろされ、従つて是が書きあげられるまでには、僅かな時間しかかからなかつたものやうに見える。漱石が旅から歸つて來たのは、八月三十日の事である。さうして是が脱稿されたのは、九月九日の事である。その間には十日の日子が挟まつてゐるが、然し漱石がこの『木屑録』を書く爲に潰した時



「木屑録」解説 正誤表

頁	行	誤	正
一	三	二年から三年	一年から二年
六	一三	多くの子規の	多く子規の
八	六	「鋸山如鋸碧崔嵬」	或は「鋸山如鋸碧崔嵬」
同	八	「客中憶家」	或は「客中憶家」
九	一三	理知と限度	理知との限度

日は、恐らくその半分よりも、もつと少ないものではなかつたかと想像される。後年作家になつてからの漱石の、原稿を書く速度は早かつた。その晩年こそ漱石は、例へば『明暗』の場合のやうに、午前中を潰して新聞の一回分を書き、そのあとは詩を作つたり畫をかいたりして暮すといふやうな習慣を持つてゐたが、一般に漱石の、殊に小説を書き出した時分の漱石の原稿の書き方は、筆をおろすまでの間は手間がとれても、一旦筆をおろすと、書き放しでもあれば、滔滔として速くもあつた。『幻影の盾』や『薤露行』のやうな、文章に鏤骨雕心の痕を止めてゐるものは例外であるとしても、例へば『草枕』などでも、凡そ一週間くらゐで出来あがつたものだと言はれてゐる。『猫』の第七回と第八回と合せて凡そ百枚の原稿は、通して、六日くらゐの間に書き上げられた。さういふ原稿の書き方は、既にこの『木屑録』の時分から、漱石によつて實行されてゐるのである。

『木屑録』は、漱石が、自發的に他人に見せる事を目的として書いた、纏まつた作品の、恐らくは最初のものであつた。然も是は、正岡子規に見せる事を目的として書かれ、また正岡子規から刺激されて書かれたものであるやうに見える。

『木屑録』の巻尾に添へた子規の批評の一節によれば、漱石と子規とが知り合ひになつたのは、明治二十二年の一月の事である。さうして二人は直ちに會心の友となつた。然も子規はこの時分から既に文壇に立つ野心があつて、漢詩を作り、和歌を作り、發句を作り、小説を作り、文藝のあらゆる形式に自分の手腕を練りつつ、驥足を伸ばす準備に怠りがなかつたやうに見える。子規が馬琴を愛讀し、春水を愛讀し、近松を愛讀し、西鶴を愛讀し、一方では、龍溪を愛讀し、逍遙を愛讀し、二葉亭を愛讀し、篁村を愛讀し、露伴を愛讀してゐたのも、凡そ

この時分の事である。その子規が『七草集』を完成したのが、明治二十二年の五月一日であつた。それは直ちに子規の友人の間に廻覽され、友人はその巻末の餘白に、各讀後の感想を書き入れた。

『七草集』は「蘭之卷」・「萩之卷」・「女郎花の卷」・「芒のまき」・「薺のまき」・「葛の卷」・「瞿麥の卷」の七卷から成り立ち、漢文・漢詩・和歌・發句・謡曲・論文・小説と、それぞれその卷でそれそれ違つた形式を用ひて、主として子規が前年の夏を過ごした向島、及び向島から引き出されたさまざまの空想を、描き出さうと試みたものであつた。是は、藝術的な價值から言へば、無論問題とするに足りないものである。然し漱石はその巻尾に、五月二十五日の日附で、漢文で批評を書いて、「不知吾兄校課之餘。何暇綽々能如此。僕天資陋劣。加疎懶爲風。齷齪没于紅塵裡。風流韻事蕩然一掃。愧于吾兄者多矣」などと言ひ、續いて、卷中に取り扱はれた事實や、それを取り扱ふ作者の風懷などを詠じた、九首の七言絶句を附け加へた。(この時漱石は、初めて自分の雅號として、漱石なる語を用ひる。然も子規が、子規といふ雅號を用ひ始めたのも、明治二十二年の五月九日に咯血して以來の事であつた。親しかつた二人が、同じ年の同じ月に、然も僅に半月を隔てて、一生の雅號を名のり始めたといふ事は、勿論偶然であるには相違ないが、何か不思議な因縁でもあるといふ氣がする)。

漱石は當時、和歌も發句も、況んや謡曲や小説など、少しも試みてはゐなかつた。ただ漱石は是より先、漢文が好きで、漢詩には自信はなかつたが、然し漢文には多少の恃む所もあつたらしく、文章をもつて身を立てる事を希望し、漢文で色んなものを書いて、その方面の修業に専念した時期を持つてゐた。是は『木屑録』の序に詳しく書かれてゐる所である。然も漱石は高等中學に這入り、英語を學び、英文學を修める氣になつてからは、寧

る英文で何かを著述する大望を懐き、その爲め好きな漢文も捨て、その方面の修業にも全然志を断つてしまつてゐたのである。然し、子規と交際し、子規の『七草集』を讀むに至つて、一度志を断つた漱石の漢詩文の世界は、假令英語と英文學との修業を壓倒するほどの勢力を持つて蘇りはしなかつたとしても、再び漱石の頭の中で、可也力強く動き出して來た。その事を證明するものは、先づ『七草集』の巻尾に附記された、漢文の批評である。次いでその批評の後に添へられた、九首の七言絶句である。『七草集』に於ける子規の漢文は、漱石の中の漢文を呼び出し、『七草集』に於ける子規の漢詩は漱石の中の漢詩を呼び出したに外ならない。

その後學年試験が済んで、夏休みが來た。一度子規によつて點火された、漱石の頭の中の漢詩文の世界は、夏休みの閑散を機會として、頻に自分自身を外に押し出さうとし始める。漱石が季兄と興津に遊んで滞在する事十餘日、東京に歸つてから、當時松山に歸省してゐた子規にあてて書いた手紙の中の、「都城之西、六十餘里、山勢隆然、拔地而起、……」と書き出してゐる、漢文を以つてする興津の描寫は、その衝迫の一つの現はれであつた。

然しこの興津の描寫は、手紙の中に書かれたものであり、又極めて短い斷片であるに止まつて、一つの全體として、纏まり上がったものではなかつた。是は漱石が興津に落つてゐられなかつた爲でもあるに違ひないし、また歸京してから、東京にゐる事僅に五日、すぐ房總地方に向つて出發するといふやうに、此所でも亦落つてゐられなかつた爲でもあるに違ひなかつたが、事實は漱石の頭の中の漢詩文の世界が、纏まつたものとして自分自身を押し出して來るほど、それほど熟し切らなかつた爲であると言つて可いと思ふ。

それが房總地方の旅では、心持の餘裕もあり、子規との漢詩の應酬もあり、次第に漱石の頭の中で熟しつづ、

八月三十日、再び東京に歸つて來て、再び落ついた心持になると、次第に纏まつた形をとつて、愈表現を迫るものとして、漱石をつき始めるのである。漱石は筆をとつた。さうして九月九日に『木屑錄』が出来あがつた。

然もその際漱石の頭の中にあつた讀者は、子規一人であつたやうである。是は子規が、當時の隨筆『筆まかせ』の中で、この『木屑錄』讀後の感想を書いた末に、「獨り漱石は長ぜざる所なく達せざる所なし。然れども其英學に長ずるは人皆之を知る。而して其漢文漢詩に巧なるは人恐らく知らざるべし。故にこゝに附記するのみ」と言つてゐるので見ても、凡その想像はつく。然もこの事は、漱石が、當時子規以外、同窓に、その方面では語るに足りるものがないと考へてゐたせゐもあつたには違ひなかつたが、然しそれよりも、寧ろ、慎み深い内氣な漱石は、相許した子規以外の人達に、それを見せようとするほど、大膽にはなれなかつたせゐであるに違ひないと思はれる。その上、積極的に慫慂したのではないまでも、いろんな意味で漱石を刺激した者が子規であるとするば、漱石が子規のみを讀者として是を書いたといふ事も、極めて當然の事ではなければならぬ。

子規は漱石を友人として、畏敬してゐたやうである。その事は子規が、當時の漱石の手紙を、多く『筆まかせ』の中に書き寫してゐるのみならず、死ぬまで漱石の手紙の大部分を、丁寧に保存してゐたのでも知れる。又その事は、この『木屑錄』の巻尾に書き入れた、子規自身の批評に就いて見ても、明白である。そのみではない。子規は『筆まかせ』の中で、手紙の書き抜き以外、所所に漱石の事を書いてゐるが、子規は漱石の事を書きさへすれば、殆んど必ず漱石を畏敬する意味の事を書いてゐるのである。「近頃我高等中學校に道德會ともいふべきものを起す人あり。余にもすゝめられたれど、余は之に應ぜざりき。漱石も亦異説を唱へたり。「余は今、道德

の標準なる者を有せず、故に事物に就て善惡を定むること能はず。然るに今道德會を立て道德を矯正せんといふは、果して何を標準として是非を知るや。余が今日の舉動は其瞬間の感情によりて起る者なり。舉動の善惡も其瞬間の感情によりて定むる者なり。されば昨日の標準は今日の標準にあらず」と。余の説も略々これに同じ」といふやうなものをそれである。「余さきつ頃夏目漱石と共に醫師に往きて診察を待つこと二時間、漱石余に對つて曰く、君はかく爲すこともなくて過ぐす時間を惜しきとは思はざるやと。余答へて「中略」といへば、漱石うなづきて「余も同感なり。余此夏駿州や總州邊へ行きし時も、時々讀書の事を思ひ出でて、時間の浪費の惜しきよしいひしに、つれの者は皆笑ひゐたり。俗人とは話もできず」云々と語りたりき。是等の人を談心の友ともいふべきにや」といふやうなものもそれである。子規はまた自分の友人を、愛友・良友・好友・敬友・益友・舊友……酒友・文友・郷友・亡友・直友・少友などと、凡そ十九種に分類して、一一その下に名前を書き込んでゐるが、その分類によれば漱石は、「畏友 夏目金氏」であつた。

然し子規は、漱石の人物や學問に對しては、畏敬の念を懷いてはゐても、文筆の才に於いては、自ら一日の長を以つて任じてゐたもののやうである。殊に慎しみ深い内氣な、然も自分の中には燦爛たる寶庫が藏されてゐるといふ事さへ知らずにあるほど謙虚でもあつた漱石は、さういふ點では、多くぬ子規の言ひなりになつて、子規に對して少しもその鋒銜を示す事がなかつた爲に、子規は一層その感を深くしてゐたものに違ひないと想像される。勿論漱石と子規とは、極めて頻繁に手紙のやりとりはしてゐた。名文の手紙を書いた漱石は、當時といへども、可也立派な手紙を書いてゐるのである。然し二十二三の年頃では、手紙の文章に注目するより前に、其所

にかかれてゐる内容に——寧ろ多くの場合は、其所に漂うてゐる感情に注目するのが普通である。「七草集」の批評も、批評の後に添へられた七言絶句も、或は手紙の中の興津の描寫も、文章として讀むよりも、手紙として讀む態度が勝つ爲に、子規にとつてそれは、漱石の文才を尊敬するといふやうな、特別な機縁にはならなかつたものであるに違ひない。従つて子規は、『木屑録』を讀むまでは、漱石に對して、一方では、到底敵はないといふ氣はあつても、一方では、私かに恃む所を持つ事が出来てゐたのである。

其所へ卒然として、『木屑録』が現はれた。子規は、漱石にさういふ事を豫期してゐなかつただけに、それだけ驚ろきも大きかつた。子規は批評の中で「然而曩者接吾兄時。使余一驚。而今復讀此詩文。使余再驚。不知後來。欲揮何等奇才。而使余幾驚耶」と言つてゐるが、是は恐らく子規が、本當にさう感じた事を、正直に告白したものであらう。

元來子規は、一面なかなか人に許さない所を持つてゐながら、一面また人に惚れ込み易く、驚ろかされ易い所を持つてゐた。是は勿論子規の感受性の豊富を示すもので、子規の弱點であるよりも、寧ろ子規の長所をなすものである。然し子規の『木屑録』に對する驚ろきは、『木屑録』そのものに對する驚ろきとともに、殆んどさういふものを豫期しなかつた漱石が、最も豫期しなかつた漢詩文の世界で、思ひがけもなく立派なものを書いたといふ事、その事に對する驚ろきも加はつて、その驚ろきは可也深刻なものであつたやうに想像される。「如吾兄者。千萬年一人焉耳」といふ批評には、無論白髮三千丈流の誇張があるには違ひないが、然し事實は子規は、さういふ言葉でしか表現する事の出来ないほどの、劇しい驚ろきを經驗したものであらう。子規がいかに驚ろいたかは、

この『木屑録』に最大級を用ひて長い批評を書いてゐるのみならず、その『筆まかせ』の中に、『木屑録』中の佳所を抜き書して、或は「距岸數町。有一大危礁當舟。……」の一節に對しては、「濤勢云々の數句は英語に所謂 Personification にて波を人の如くいひなし、怒といひ攫といひ躍といふ、是の如きつゞけて是等の語を用ひしは恐らく漢文に未だなかるべく、漱石も恐らく氣がつかざりしならん。されど漱石固より英語に長ずるを以て知らずくこゝに至りしのみ。實に一見波濤激礁の狀を思はしむ。又後節鳥を敘するの處、精にして雅、航海中數々目撃すること、而も前人未だ道破せず、而して其文支那の古文を讀むが如し」と評し、「鋸山如鋸碧崔嵬」を以つて始まる詩に對しては、「其曲調極めて高し。漱石素と詩に習はず、而して口を衝けば則ち此の如し。豈畏れざるを得んや」と言ひ、「客中憶家」の詩に對しては、「此詩の如き眞個の唐調にて天衣無縫ともいはんか。殊に第二句の如き我輩等の思慮し得る句にあらず」と斷じ、總評して「余の經驗によるに英學に長ずる者は漢學に短なり。和學に長ずる者は數學に短なりといふが如く、必ず一短一長あるものなり。獨り漱石は長ぜざる所なく達せざる所なし」と激稱してゐるのを見ても、明白である。

然し子規も亦一箇の英雄たる事を失はなかつた。子規の藝術感覺的確と雋敏とは、子規が『木屑録』の到る所に、朱をもつて誌した、寸評に於いても現はれる。それは、今日の眼を以つてしても、大抵は首肯し得られる批評であるに止まらず、その批評の多くは、賞美するにしても非難するにしても、悉く漱石の急所に觸れてゐるのである。子規が此所で感じとつたものは、多少違つた言葉で言ひ現はしさをすれば、そのまま後年の漱石の小説の描寫の、大部分に適用する事が出来さうにさへ思はれるものを持つてゐる。例へば子規が口を極めて推稱し



た所謂 Personification による自然描寫と、その岩礁の上にとまる「赤冠蒼脛」の鳥の描寫とは、自然を動的なものとして見、潰壓的な自然の動を一層潰壓的な一層動的な表現を以つて描寫する事を得意とした、特に小説作家としての初期の漱石の描寫の特徴をなすものであるに外ならなかつた。然もその際、一面では大きな世界を大きく攫むとともに、一面ではその世界の中の小さな美しい一部分を精到に捕捉し、それと他の部分とを對照反襯させる事によつて、大きな世界をも小さな世界をも同時に活かしつつ、二つのものの調和から特別な趣きを導いて來る事も亦、小説作家としての漱石の描寫の特徴をなすものであるに外ならなかつた。また例へば子規は、「倒竿而測其深則至浚竿水觸手而不能達也」の寫生を褒めたあとで、それに續く「蓋潮水澄清日光透下而屈曲故水底之物浮々焉如在近而其實數尋之下矣」の理窟を非難する。この種の寫生も亦漱石得意の寫生であり、この種の理窟も亦漱石に長い間付いてまはつた理窟であつた。殊にこの理窟は、小説作家としての初期の漱石の描寫に頻出し、當時屢非難され、然も漱石はそれを容易に首肯しようとしなかつた所のものであつたのである。

事實この『木屑録』は、精到に研究すればするほど、後年の漱石の諸ろの特徴を、その中に縮圖として貯へてゐる作品であつた。漱石のものの見方や感じ方、見たもの感じたものを表現する表現の仕方、漱石のロマンティシズムとリアリズムとの限度とその交錯の仕方、もしくは漱石の感情と理知と限度とその交錯の仕方、漱石の自然と人生とに對する態度、その他それに似た問題を提げてこの『木屑録』に對するならば、人は此所から、後年の漱石を構成するあらゆる要素を、それも可也鮮やかな萌芽の形に於いて捕捉する事に、さしたる困難を感じないに違ひない。——無論その事は、この『木屑録』が、堂堂たる傑作であるといふ事を意味しない。假令當時の

子規が、當時の驚嘆から、「千萬年一人焉耳」と叫んだとしても、是がより多く歴史的意義をしか持たない作品であるといふ事は、言を費すまでもない事である。然も、その歴史的意義から言へば——夏目漱石なる作家の生成過程を跡づける材料としての意義から言へば——この『木屑録』が重大である事は、是亦言ふを要しない事である。なぜなら我我は此所で、嘗に後年の漱石のあらゆる要素の縮圖を發見する事が出来るのみならず、當時の子規を知り、當時の子規を通して後年の子規を知り、且つ漱石と子規との關係を、普通に考へられてゐるよりも、更に深切に知る事が出来るからである。

漱石は後に子規に勧められて、發句を作り始めた。更に後に漱石は子規にせがまれて、『ホトトギス』に『倫敦消息』を書いた。漱石がロンドンから歸つて來た時には、子規は既に死んでゐたが、當時子規の後繼者として『ホトトギス』を經營してゐた高濱虚子は、漱石にせがんで、漱石に『自轉車日記』を書かせ、『猫』を書かせ、『幻影の盾』を書かせ、『坊つちゃん』を書かせた。さうして漱石は、竟に教壇を去つて、純粹な作家になつた。然も當時、英語と英文學とに専心してゐた、學生漱石を刺激して『木屑録』を書かせた者も、さうしてその『木屑録』を激稱して、漱石の創作的方面を鼓舞した者も、亦子規であつたとすれば、子規は作家漱石を作り上げる上に、なくてはならない重要な人物であつたと言つても、決して過言ではないのである。——勿論子規がなくても、漱石の内なる寶庫は、何等かの機縁に觸發されて、その全貌を示し得たには違ひなかつた。然し若し子規がなかつたなら、漱石は或は、學者としてのみ、その一生を過ごしてゐたのかも知れなかつた。その意味では、漱石と子規との交際は、作家漱石にとつては、殆んど運命的なものであつたと言つて可いのである。

その運命的であるとも言はば言はるべき子規との交際に於いて、漱石に對する子規の、運命的な働らきかけの第一歩を示すものが、この『木屑録』なのである。

昭和七年十一月二十六日

小 宮 豊 隆

譯文

木屑錄

—明治二十二年九月九日脱稿—

胸懷極めて高し、

余・兒たりし時、唐宋の數千言を誦し、喜んで文章を作爲る、或は意を極めて彫琢し、句を経て始めて成り、或は咄嗟・口を衝いて發し、自ら澹然樸氣あるを覺ゆ、竊に謂へらく、古の作者、豈臻り難からんや、と遂に文を以て身を立つるに意あり、是より遊覽登臨には必ず記あり、其後二三年にして、篋を開き、作りし所の文若干篇を出して之を讀むに、先に以て意を極めて彫琢すと爲せしもの、則ち頽墜纖佻たり、先に以て澹然樸氣ありと爲せしもの、則ち飢饉艱澁たり、之を人に譬ふれば、一は妓女の奄々として氣力なきが如く、一は頑兒の悍傲にして長者を凌ぐが如し、皆觀るに堪へず、稿を焚き、紙を扯き、面・赤を發して、自失すること之を久うす、竊に自ら嘆じて曰く、古人萬卷の書を讀み、又萬里の遊を爲す、故に其文雄峻博大にして、卓然として奇氣あり、今・余・選要にして越趨し、徒だ父母の郷を守つて、足・都門を出でず、而して

見る所も也た好し、

其文の古人の域に臻らんことを求むるは、豈大過ならずや、と因て慨然として屣を曳き遠遊せんことを欲して、未だ志を果すこと能はず、而して時勢一變、余・蟹行の書を挾んで郷校に上る、校課役々、復た鳥迹の文を講ずるに暇あらず、詞賦簡牘の類は、空く之を高閣に束ね、先に所謂纖桃靨なるもの、亦爲ることを得ざらんとす、又安んぞ古の作家を望まんや、明治丁亥、遂に筮を擔うて富岳に登る、函領を越え、白雲蓬勃の間を行けば、脚底・積雪數尺にして、蹠は凍り指は戦くも、遙に八州の山を瞰せば培塿の如く、豪氣稜々として雲を凌がんと欲す、然も一篇の以て壯遊を敍すること能はず、今茲七月、又季兄と興津に遊ぶ、地は東海の名區たり、滯留すること十餘日、蕭散無聊なりしも、而も遂に一の詩文を得ず、嗟乎、余・先には文章を爲くるに意ありて、而も名山大川の其氣を搖蕩するもの無く、今は則ち名山大川を覽て、而も一字の風光に報ゆるもの無し、豈天にあらずや、八月、復た海に航して房州に遊び、鋸山に登り、二總を經、刀川に溯りて歸れり、日を経ること三十日、行程九十餘里、既に歸れば、秋雨日を連ぬるに會ふ、一室に閑居し、旅中の快樂辛酸の事を懷うて、其情に堪へざる者あり、乃ち筆を執つて之を書し、積んで數葉に至れり、竊に謂へらく、先きの記あらんとして遊ばざりし者と、遊ぶあつて記せざりし者と、相償ふに庶幾からんか、と然れども、余既に意を文章に絶ち、且つ此篇、閑適の餘に成れば、則ち其の纖桃靨なること、論なきのみ、命けて木屑と云ふは、特だ其の塵陋なるを示せるなり、

余・八月七日を以て途に上る、此日大に風ふく、舟中の人、概ね皆眩怖して起つこと能はず、三女子あり、甲板上に坐して、談笑自若たり、余深く鬚眉漢の中輻者流に若かざるを愧ぢ、強ひて欄に倚つて危坐す、既にして風

水相闘ふの狀を觀んと欲し、蹠跚として起つ、時に怒濤舟を掀げ、舟欹斜して、殆んど覆らんとす、余歩を失つて傾跌す、跌るとき、盲風疾至し、帽を奪つて去る、顧れば則ち落帽飄々として、跳沫中に回流せるを見るのみ、舟人皆手を拍つて大に笑ふ、三女子も亦嘖然として、余の亡狀を嗤ふが如し、之が爲に忸怩たり、

余・房に遊んでより、日に鹹水に浴す、少きも二三次、多ければ五六次に至る、浴するとき、故らに跳躍して兒戲の狀を爲す、食機を健ならしめんと欲してなり、倦れば則ち熱沙の上に横臥す、溫氣腹を浸たして、意甚だ適し、是の如きこと數日、毛髮漸く緒らみ、面膚漸く黄ばむ、旬日の後には、緒らむものは赤と爲り、黄ばむものは黒となり、鏡に對して爽然自失せり、

興津の景は、清秀穩雅にして、君子の風あり、保田の勝は、險奇峻峭にして、酷だ奸雄に似たり、君子は奇特の人を驚かす者なし、故に婦女も狎れて近づくべし、奸雄は變幻して測られざれば、卓然として群せざる者にあらずんば、其怪奇峭曲の態を喜ぶこと能はざるなり、嘗試に二絶を作りて之を較せんか、曰く、

風穩波平七月天、韶光入夏自悠然、出雲帆影白千點、總在水天鬢髭邊、

西方決望茫茫々、幾丈巨濤拍亂塘、水盡孤帆天際去、長風吹滿太平洋、

余・大都紅塵の中に長じ、一丘一水の以て觀を壯にするに足る者なく、古人描く所の山水幅にして、丹碧攢簇し、赭翠交錯せるものを見る毎に、神の往くに堪へざりしが、東海に房總に遊ぶに及んで、山雲吐吞の狀を窮め、風水離合の變を盡くすを得て、而る後意始めて降り、一絶を賦す、曰く、

二十餘年住帝京、倪黃遺墨暗傷情、如今閑却壁間畫、百里丹青入眼明、

白素罪なし、鏡豈心あらんや、

君子未だ必ずしも奸雄に勝たざるなり

何ぞ余に類せるの甚しき

同遊の士は、余を合せて五人なるも、風流韻事を解する者なく、或は酒を被りて大呼し、或は健啖して食に侍せる者を驚かす、浴後には輒ち棋を圍み、牌を闘はして、以て閑を消するのみ、余獨り冥思遐搜し、時に或は呻吟して、甚だ苦むの状を爲す、人皆非笑して以て奇癖と爲すも、余は顧みざるなり、邵青門の思を構ふるの時に方つてや、大苦ある者に類せるも、既に成れば則ち大に喜び、衣を牽き床を遶りて狂呼す、余の呻吟する、これに類せるものあり、而して傍人は識らざるなり、

一夕、獨り寐ねず、臥して濤聲を聞き、誤つて以て松籟となし、因て憶ふ、家に在りしの日、天大に寒く、戸を閉ぢて書を読む、時に星高く氣清く、燥風颼颼として、窓外の梧竹松楓・颯然として皆鳴りしことを、屈指すれば既に數年なり、而して余や碌々無狀にして、未だ寸毫の學に進むことあらず、又漫に山海の遊を爲して、歲月の倏忽にして、老の將に至らんとするを知らず、之を當時の苦學に視ぶれば、豈忸怩たらざらんや、

南出三家山、百里程、海涯月黑暗愁生、濤聲一夜欺鄉夢、漫作故園松籟聲、

意は則ち諧謔なるも、詩は則ち唐調に似て、吾兄の獨擅此境、吾輩の門戸を窺ふことを許さず

客舎にて正岡獺祭の書を得たり、書中戯に余を呼んで郎君と曰ひ、自ら妾と稱せり、余失笑して曰く、獺祭の諧謔一に何ぞ此に至るや、と輒ち詩を作り之に酬いて曰く、鹹氣射顔顏欲黃、醜容對鏡易悲傷、馬齡今日廿三歲、始被佳人呼我郎、と昔・東坡、篋管竹の詩を作つて文與可に贈る、曰く、料得清貧饑太守、涓濱千畝在胸中、と與可その妻と笥を焼いて晚食せり、函を發いて詩を得、失笑飯を噴いて案に滿てり、今・獺祭・齡は弱冠を過ぎず、未だ室を迎へず、且つ夏日笥を得るの理なきも、然れども、詩を得るの日、飯を噴いて案に滿つること、與可と同じきこと無らんや、余・家に歸りて、又獺祭の書を得たり、余が韵に次して曰く、羨君房海醉鵝黃、

笑つて曰く、詩佳は則ち佳なり、而も實にあらざるなり、只自ら慰むるのみ

山に合抱の樹なれば、則ち石質なるを知る、是等の思想は、今日の少年に在りても、亦保老人の一驚を博すべし

鹹水醫痾若藥傷、黃卷青編時讀罷、清風明月伴漁郎、と余笑つて曰く、詩は佳は則ち佳なり、而も實にあらざるなり、余・心神衰昏して黃卷を手にせざること久し、獺祭固より余の慵懶を識れり、而るに何ぞ此言を爲すや、と復た詩を作つて自ら慰めて曰く、脫却塵懷百事閑、儘遊碧水白雲間、仙鄉自古無文字、不見青編只見山、と、

余・房の地を相て之を三分す、而して其二は則ち山なり、山甚しく高からざるも、然れども、皆峻削空を衝き、質を石にし、膚を土にして、絶えて合抱の樹なし、叔子の所謂孤劍空を削り、天より仆るゝもの、比々皆是なり、東北の一脈、蜿蜒として房總を横截せるもの、最も高く最も峻にして、之を望めば、峯々嶮峻にして、鋸刃の碧空に向つて列れるが如し、名けて鋸山と曰ふ、鋸山の南端岐れて三と爲る、中央の最も高きものを瑠璃峯と曰ひ、その東の稍、低きものを日輪峯と曰ひ、その西の最も低きものを月輪峯と曰ふ、而して日本寺は峯の中腹に在り、聖武帝の時、僧の行基救を奉じて東下し、此山を相て曰く、是れ眞に靈境なり、と遂に山を開き寺を創くり、院十二・坊一百を建つ、良辨・空海・慈覺等の諸僧、先後に皆來り遊び、其の手刻する所の佛像、今猶ほ存すと云ふ、其後興廢一らず、安永中・山の僧愚傳と云ふもの、石を伊豆に得、工に命じて羅漢像一千を刻せしめ、空海等彫せし所の者を合せて、凡そ一千五十有三、之を山に安ぜり、是より寺は羅漢を以て著はれ、遊ぶもの、或は之を豐の耶馬溪に比すと云ふ、己丑八月某日、余諸子と登る、溪行すること五百歩にして山門を得、楮剝落し、藁は散り欄は摧け、遊ぶもの皆其名を壁上に書して去る、塗鴉屎に滿ち、殆んど讀む可からず、又登ること數十歩にして一小池を得たり、柳陰四に合ひ、紅葉湛然たり、山風時に一過すれば、荷葉微く動き、葉上の露珠、溜

々として搖曳し、墜ちんと欲して墜ちず、池に沿うて左折し、石磴を登ること數級にして、平地數十弓を得、芭蕉梧桐の屬、森然として陰を成し、小屋二つを其中に構へり、茅の檐、竹の欄、耕織の家の如し、之を問へば則ち曰く、山僧の居なり、と時に日は既に高きも、門を鎖し戸を閉ぢ、関として人なきが如し、導者云ふ、維新の變、朝廷・寺屬の宅地田園を收めて、之を官に没し、山遂に殆んど墟せり、と余・重蔭交柯の間を徘徊し、往時・緇徒の豪奢なる、錦繡を袈裟にして、朱廊彩堦の間に往來せしことを想見し、愴然たること之を久うす、屋前は軟草氈の如く、峯巒の缺くる所、遙に溟渤を瞰て、雲鳥風帆・歷々として指すべし、是を経て、路漸く險しく、岩を攀ぢ蘿を捉へて上り、遙に石佛の雜然として巖上に列れるを見る、走つて之に就かんと欲すれば、峯廻はり路轉じて、忽ち之を失ふ、此の如きこと數次なりしが、數刻の後、始めて達することを得たり、像の高さ、大なる者は三尺、小なる者は一尺、或は眉目磨滅して辨すべからざるあり、或は遊者に毀損せられて、頭首四肢を失へるあり、而して其完き者は、姿態百出し、容貌千狀にして、一の相似たるもの無し、亦以て刻者意を用ゐるの深きを見るべし、配置の法、亦焉に悉く萃め盡く列せざれば、遊ぶもの、初め石像二百許を路傍の大石の下に見るや、以爲へらく、羅漢の勝は此に盡く、と既にして巖角を廻れば、忽ち又百餘像を見る、仰いて頭上を瞻れば、巨巖巖々として墜ちんと欲す、畏れて之を避けんとして、則ち巖上又數十像を安ぜり、或は溪窮り路盡き、一洞豁然として、滿洞皆羅漢なるあり、蓋山路崎嶇たれば、平地を得て之を萃列すること能はず、而して遊ぶ者も亦歩に隨つて觀を改め、其勝の意表に出づるを喜ぶなり、午時山巔に達して憩ふ、群山莽蒼として、先に雲半に在りと以爲ひしもの、今皆脚底に在り、故に其蜿蜒起伏の狀、晰然として觀るべし、余・房州に遊ん

或字削る可し、
羅漢を意外に得たるの狀見るが如し、

と以爲ひの四字、

皆の一字、故に其の三字は、文勢を殺ぐに似たり、割愛せんこと如何、

不掃は滿地に作つては如何、
吾兄の詩を作るや、意を用ゐざる者の如し、而して形狀は極めて精にして、曲調は極めて高し、眞に天稟の才なり、

でより、日夕鋸山を望見して、而も未だ其高峻、此の如くなるを知らざりしなり、同遊の土川關某は豐の人なり、余が爲めに語つて曰く、耶馬溪は、廣袤數十里にして、岩壑の奇は、固より此に止まらざれど、而も羅漢の勝には、遂に及ぶこと能はず、と余・銘山の勝・廻かに群山に異れるを壯とし、又羅漢の奇を觀て、而して古寺廢頽して脩められず、斷礎遺柱の空く荒烟冷雨の中に埋没せるを悲み、慨然として之が爲めに記す、

鋸山如^ク鋸碧崔嵬、上有^ニ伽藍倚^ニ曲隈、山僧日高猶未^レ起、落葉不^レ掃白雲堆、吾是北來帝京客、登臨此日懷^ニ往昔、咨嗟一千五百年、十二僧院空無^レ迹、只有^ニ古佛坐^ニ磅礪、雨蝕苔蒸闕^ニ桑滄、似^ク嗤浮世榮枯事、冷眼下^ニ瞰太平洋、

保田の北、海に沿うて行くこと五百歩、鋸山峯然として面に當り、嵯峨にして歩むべからず、數年前、官・命じて巖を辟き洞を鑿つこと若干、以て往來に便せり、是より過ぐるもの、復た蹠を蹠み杖を曳くの勞なく、車を驅りて山海の勝を縱覽すること得、洞は高さ二丈、廣さは高さに視れば、其半を減ぜり、蹠もて洞口を造り、以て其崩壞を防ぐ、巖然として關門の如し、洞中は陰黒にして、溪流岩を浸し、兩壁皆濕ふ、或は滴瀝して流下するあり、屐を曳きて歩めば、登音曼然、久くして後に已む、洞路直條せれば、過ぐる者、遙に洞口の豁然として、水光激灑、これに映ぜるを見、洞は海に接すと以爲ふも、既に洞を出づれば、則ち石路一曲して、身は怪岩亂礫の間に在り、此の如きこと數次、一洞を過ぐる毎に、頭上の山石は益々犖确にして、脚底の潮水も、亦益々芻芻す、眞に奇觀なり、同遊の士井原某、常に辯を好み、山水の勝を説く毎に、噴々名狀して已まざるに、此日緘黙して一言を發せず、余・其故を問へば、則ち曰く、言ふことを欲せざるにあらず、言ふこと能はざるなり、と、

大愚・及ぶべから

大愚山人は余が同窓の友なり、賦性恬澹にして、書を讀み禪を談するの外、他の嗜好なし、一日書を寄せて曰く、閑居して事なし、禪刹に就き、佛書を讀み、時に童兒と園に遊んで蟬を捉ふるのみ、と其高逸なること此の如し、山人嘗て余に語つて曰く、深夜結跏して、萬籟盡く死せば、身の冥漠に入るを覺えざるなり、と余は庸俗にして、露地白牛を見るに慵うく、無根瑞草を顧みず、之を山人に視て、愧づるあること多し、余既に保田の隧道を看て、其觀の瑰怪なるを樂む、明日之が詩を爲つて曰く、

洞中灣は安を欠けるに似たり、

君不見鋸山全身石稜々、古松爲髮髮鬚鬚、橫斷房總三十里、海濤洗麓聲澎湃、別有三人造壓天造、劈巖鑿石作隧道、窟老苔厚龍氣腥、蒼涯水滴多行潦、洞中遙見洞外山、洞外又見洞中灣、出洞入洞幾曲折、洞々相望似連環、連環斷處岸斬窄、還喜奇勝天外落、頭上之石脚底濤、石壓頭兮濤濯脚、

吾兄の詩、輕々に説き去り、所謂落語是美詩なる者に似たり、

保田の南里許にして、灣の窈然として半月の狀を爲せるものあり、灣の南端に一巨岩あり、高さ五丈、上豊に下削られ、狀ち巨人の拳の如く、蒼然として地を裂いて起れり、掌の下端は、稍、坦平にして、數人を坐せしむべし、其上は噴阮開張して簾の如く、之を望めば、墜ちんとして墜ちず、惴々焉として安んぜざる者あるが如し、因て憶ふ、二年前、柴野是公と江ノ島の遊を爲し、黎明・山に上る、時に海風森く作り、草樹皆俯す、是公跳叫して曰く、滿山の樹、皆戰々兢々たり、と余爲に絶倒せんとす、是公をして此岩を看せしめば、亦必ず曰はん、戰々兢々として深淵に臨めり、と巨岩の後ろ、又一大石ありて之を彌縫し、起伏すること數十歩、余・石を躡み水に臨む、時に天晴れ風死し、菜藻旣々然として藍を搖がし碧を曳く、游魚其間を行き、錦鱗頰尾、忽ち去り忽ち來る、水底には螺石布列し、捫つて觀るべきが如し、竿を倒まにして其深さを測れば、則ち竿を没して水・手

是公にして此諧諒を爲して、而る後始めて妙、吾兄、自ら以て柳州に比す、我豈批せざるを得んや、「則ち竿を没して」

を改めて「竿盡き」と爲しては如何、屈曲の二字、漢學者流をして之を見せしめば、則ち以て誤寫と爲さん、蓋潮水云々より、數尋の下に在れば、前段を解釋したるに過ぎずして、却て風味を減殺す、割愛しては如何、豈其れ然らんや、

に觸るゝに至るも、而も達すること能はざるなり、蓋潮水澄清せれば、日光下に透して屈曲す、故に水底の物、浮々焉として、近きに在るが如くにして、其實は數尋の下に在ればなり、余其風物の冲融にして、光景の悠遠なるを觀、心甚だ樂む、乃ち筆を執つて之が記を爲くる、而して亦嘆なきこと能はざるなり、嗚呼天下の奇觀亦多し、甚だ遊を好む者と雖、盡く觀て盡く記すること能はざるなり、而して其の平居焉に登臨し、焉に往來する者は、概ね皆樵夫牧童にして、其奇を記して之を天下後世に傳ふること能はざるなり、幸にして遊ぶもの至るも、而も其文或は傳ふるに足らざるあり、既に傳ふるに足るも、而も或は流離困苦竄謫の餘に成り、怨憤凄惋、徒らに山水を藉りて、其鬱勃不平の氣を洩らすあり、是れ特作者に幸して、山水に幸せざるもののみ、その山水に幸する者に至りては、則ち心に憂愁なく、身に疾病なく、陶然として樂み、悠然として歸ることを忘れ、而して其文も亦卓然として、水光嵐色の爲に、其氣を吐くに足る者にあらずんば能はざるなり、豈至難ならずや、今・余の境は、陶然として之を樂み、悠然として歸ることを忘るゝに足つて、而も文章焉に副はず、悲む可きかな、誕生寺は房の小湊に在り、北華の宗祖日蓮此に生る、後人・佛刹を其廬址に建つ、故に名けて誕生寺と曰ふ、寺は山を負ひ海に面す、潮水滄茫、漚かれて復た漲る、所謂鯛浦是れなり、余京に在りて、鯛浦の奇を聞くこと熟せり、乃ち舟を賃うて發す、岸を距るゝこと數町にして、一大危礁の舟に當へるものあり、濤勢の蜿蜒長うして來れるもの、礁に遭うて激怒し、之を攫み去らんと欲して能はず、乃ち躍つて之を超ゆ、白沫噴起し、碧濤と相映じ、陸離として彩を爲せり、礁上に鳥あり、赤の冠・蒼の脛、其名を知らず、濤來れば一搏して起ち、低飛回翔し、濤の退くを待つて礁上に復す、余・諸子と奇と呼んで歎まず、舟人笑つて曰く、此れ道ふに足らざるなり、

波濤を敘すること詳細にして、紙上に波瀾を見る、東洋の文字に未だ曾て此英語に所謂 Personification

類する者を見ず、吾兄之を蟹行の書に得たるか、鳥を彼すること、亦極めて細・極めて雅なり、水經中にも恐くは此文字なからん、之を先きの柳記に擬せる者に比せば、數等を超越せり、鯉々四散の一句、穩ならざるに似たり、作者既に左氏に擬せり、余復た何をか言はん、然れども余が郷里屢津濱に魚獄なるの略此に類せるを見、記せんと欲して能はざりしなり、今斯文を得たるに、恰も余の爲めに魚獄の狀を記せる者の如し、吾兄は余の麻姑なる黄金色の三字、未だ當を得ず、

一路蕭々の意、

客をして更に大に奇なる者を觀せしめん、と乃ち一人をして杓を持して舳に立たしめ、自ら舳に在りて櫂を操る、杓は方五寸にして、鯉を盛ること數百、柄の長さ五尺にして、立てるもの其端を持し、將に杓を揮つて鯉を水に投ぜんとする者の如くし、令を竣つて未だ發せず、舟人乃ち余を顧みて曰く、客但だ水を觀よ、と余因て舷に凭たれ、俯して凝視す、之を頃らくして舟人呼んで、鯉々四散せと曰へば、聲に應じて下ぐ、忽ち綺紋の水底に生する有り、簇然として動く、既にして漸く近づく、之を諦觀すれば、則ち赤髮無數、波を排して騰上し、以て鯉を争へるなり、時に日方に午、炎暉波を射り、波光燦燦として、錦鱗赤章その間に出没し、或は潑刺して鬣を露はし、或は踴躍して頭を出す、陶彩燦然、舟を環つて數歩の間、一時皆黄金色となる、舟人曰く、漁父は舟行すること十里にして、始めて能く棘鬣魚を捕ふ、今、此水は岸を距ること僅に數丁のみ、而して斯魚群生す、既に奇なり、鯉を争うて人を畏れず、更に奇なり、夫の濤礁相嚼み、風水相鬪ふが若きは、則ち至る所にして有り、安んぞ奇と爲すに足らんや、と既にして舟を捨て、歩いて誕生寺に抵り、其の藏する所の書畫數十幅を觀る、日蓮書する所のもの最も多し、僧云ふ、高祖生れし時、其家人・棘鬣二尾を得たり、磯上に釣りて、(譯者曰く、此句所謂倒裝)、明日亦た得たり、此の如きこと七日、是より土人・高祖の故を以て、敢て此魚を捕へず、又崇んで明神と稱して、其名を稱せず、或は竊に捕へて食ふ者あらば、必ず瘡を病んで死す、と、

自東金至銚子、途上口號、

風行空際、亂雲飛、雨鎖秋林、倦鳥歸、一路蕭々荒驛晚、野花香濺綠蓑衣、

賃舟溯刀水、舟中夢鵲娘、鵲娘者女名・而非女也、

扁舟行盡幾波塘、滿岸新秋芳草長、一片離愁消不得、白蘋花底夢鵲娘、

天明、舟達三堰旗亭、即事、

烟霧夢々見不看、黎明人倚碧欄干、江村雨後加秋意、蕭瑟風吹衰草寒、

客中憶家、

北地天高露若霜、客心蟲語兩淒涼、寒砧和月秋千里、玉笛散風淚萬行、他國亂山愁外碧、故園落葉夢中黃、何當後苑閑吟句、幾處尋花徒繡牀、

別後憶京中諸友、

魂飛千里墨江涓、涓上畫樓楊柳枝、酒帶離愁醒更早、詩含別恨唱殊遲、銀釭照夢見蛾聚、素月匿秋知雨隨、料得洛陽才子伴、錦箋應寫斷腸詞、

余の此篇を草するや、筆を執つて紙に臨み、先づ其の書せんと欲する所の者を思ふ、既に心に會するあれば、輒ち筆を揮つて起ち、直に其の思ふ所を追ふ、或は墨枯れ筆禿れて而も已まず、既に成れば、藁を抛つて復た一字を改めず、或は之を難じて曰く、古人の文を作るや、一字の未だ安かならざる者あれば、則ち日を終て之を考へ、一句の未だ安はざる者あれば、則ち句に經つて之を思ひ、鍛鍊推敲、必ず其力を盡くして、而る後之を出す、故に其文蒼然として古色あり、鏘然として金石の音を爲す、今・子・才古人に及ばざること亦遠し、而して紙に臨んで經營刻苦することを知らず、漫然として筆を下し、速からざらんことを之れ恐る、是れ古人に及ばざるの才を以て、古人の爲し難しとするものを爲さんと欲するなり、豈大過ならずや、と余

眞箇唐調、我輩後へに瞭若たり、

第二句は安を欠く、

笑つて曰く、文を作るは猶ほ畫を爲くるが如し、畫を爲くるの法、速きあり遅きあり、必ずしも一に牽束されず、意匠慘澹、十日に一水、五日に一石、是れ王吳の山水を畫くなり、衣を振うて起ち、筆を揮うて従ひ、頃刻にして之を成す、是れ文鄭の竹と蘭とを畫くなり、夫れ王吳の山水は固より妙なり、而も文鄭の蘭と竹と、豈神に入らざらんや、今・余の文も亦蘭竹の流のみ、速かるべく、遅かるべからず、且つ余の不文なる、假ひ期年にして一篇を成さしむるとも、亦當に此の如きに過ぎざるべし、則ち其の兔起鶻落の速きは、亦蚓步蛇行の遲きに優らずや、陰曆八月既望、東都・夏目金・牛籠の僑居に書す、時に庭棗既に熟し、落實窓を撲つて、秋意蕭然たり、

自嘲、書木屑錄後、

白眼甘期^ニ與^レ世疎^一、狂愚亦懶^レ買^ニ嘉譽^一、爲^レ譏^ニ時輩^一背^ニ時勢^一、欲^レ罵^ニ古人^一對^ニ古書^一、才似^ニ老駝^一驚且^レ駭、識^ニ如^ニ秋蛻^一薄兼^レ虛、唯贏^ニ一片烟霞癖^一、品^レ水評^ニ山臥^一草廬^一、

第三句、眞に備はれるのみ、第四句、斯中の趣は、只吾兄と余と之を得たり、後聯、恐くは詩を成さず、

釣に巧なる者は、強ひて釣ることを求めずして、而も魚争うて釣に上り、釣に拙なる者は、則ち餌を撰へ地を換へ、銳意・釣ることを求めて、而も魚終に釣に上らず、吾兄の詩文を成すや、必ずしも鍊磨彫琢せず、必ずしも意を用ゐる心を勞せず、而して其文や錦繡にして、其詩や珠璣なり、山を敘し水を狀するに、或は流暢平易なるあり、或は奔放峻拔なるありて、紙上に山躍り、筆端に海湧く、魚を記るし鳥を形はせば、精緻にして冗ならず、簡雅にして解し易し、嗚呼、吾兄・何の學を修め、何の術を得て、而して此域に至れるぞ、古人・萬卷の書を讀み、又た萬里の遊を爲せしこと、眞に吾兄の謂へる所の如し、然りと雖、吾兄は未だ萬卷の書を讀まざるなり、而して其の作る所の詩文は、未だ曾て古人の眞髓を得ずんばあらず、吾兄は未だ萬里の遊を爲さざるなり、而して記する所の詩と文とは、未だ曾て豪壯雄健にして、泰山の與^ニ高く、江河の與^ニ長からずんばあらず、嗚呼、吾兄・何の學を修め、何の術を得て、而して此域に至れるぞ、書を開いて讀まば、庶人も公卿たるべく、師に就いて學ばば、白痴も碩儒たるべし、若夫れ學ばず修めず、而も机に臨めば、則ち金句・玉章、争うて筆端に上るは、則ち先天の性・之をして然らしむるなり、吾兄の如き、天稟と言はずして、則ち將に何とか言ふべき、余・幼より文を好み詩を屬り、未だ曾て校課を顧みず、而して時あつて景勝を敘し・胸懷を攄べんと欲し、千思萬考して、日を費やし夜を徹するも、而も墨は滯り・筆は澁り、漸くにして得る所あれば、則ち蕪詩惡文に過ぎず、之を吾兄に比ぶれば、豈啻に釣者の巧と拙とのみならんや、余・吾兄を知ること久し、而して吾兄と交れるは、則ち今年一月に生まれり、余の初め東都に来るや、友を求むること數年にして、未だ一人を得ず、吾兄を知るに

及んで、乃ち竊に期する所あり、而して其の己を知るを辱うするに至つて、而して前日を憶へば、其の吾兄に得る所は、甚だ前に期せし所のものに過ぎたり、是に於てか、余は始めて一益友を得たり、其の喜知るべきなり、余は吾兄の英文に長ぜることを知るや久しかりしも、而も吾兄の漢文を見るは、則ち此の木屑録に始まる、余の吾兄と校に入るや、ともに駄舌を學び、蟹文を草す、而して吾兄は嶄然として頭角を現はし、蟹語を話すこと猶ほ邦語のごとし、然れども余・以爲へらく、西に長ぜる者は、概ね東に短なれば、吾兄も亦當に和漢の學を知らざる可し、と而るに今此詩文を見るに及んで、則ち吾兄の天稟の才なるを知れり、其の詩文を能くするは、則ち其才の用のみ、必ずしも文字の自他と學問の東西とを問はざるなり、吾兄の如きは、千萬年にして一人のみ、而して余や幸に咳嗽に接することを得、豈之を敬して愛せざる可けんや、然而して、曩に吾兄に接せし時、余をして一驚せしめ、今復た此詩文を讀んで、余をして再驚せしめたり、知らず、後來復た何等の奇才を揮うて、余をして、幾驚せしめんと欲するか、余や拜觀を辱うし、且つ妄に批評を爲せり、今還璧するに及んで、復た一言を卷尾に題す、請ふこれを恕せよ、

明治二十二年十月十三日夜、東臺山下の僑居に於て、

獺祭魚夫常規謹んで識す

函山雜詠

前聯雅健、後聯穩雅、
昨夜着征衣、今朝入翠微、
雲深山欲滅、天濶鳥頻飛、
驛馬鈴聲遠、行人笑語稀、
蕭々三十里、孤客已思歸、

前聯雖陳套、亦可、
函嶺勢崢嶸、登來廿里程、
雲從鞋底湧、路自帽頭生、
孤驛空邊起、廢關天際橫、
停節時一顧、蒼靄隔田城、

頷聯雄壯、
來相峯勢雄、恰似上蒼穹、
落日千山外、號風萬壑中、
馬蹕逢水絕、鳥路入天通、
決眦西方望、玲瓏岳雪紅、

頸聯唐調、
飄然辭故國、來宿葦湖涓、
排闥何須酒、遺閑只有詩、
古關秋至早、廢道馬行遲、
一夜征人夢、無端落柳枝、

結句有悠然見南山之趣、
百念冷如灰、靈泉洗俗埃、
鳥啼天自曙、衣冷雨將來、
幽樹沒青靄、閑花落碧苔、
悠々歸思少、臥見白雲堆、

奈此宿痾何、眼花凝似珂、
豪懷空挫折、壯志欲蹉跎、
山老雲行急、雨新水響多、
半宵眠不得、燈下默看蛾、

濕字似欠安

三年猶患眼。何處好醫盲。崖壓浴場立。湖連牧野平。雲過峯面碎。風至樹頭鳴。偏悅遊靈境。入眸景物明。
恰似泛波鷗。乘閑到處留。溪聲晴夜雨。山色暮天秋。家濕箇生壁。湖明月滿舟。歸期何足意。去路白雲悠。

送友到元函根

第三與第二同。勇割爲可。

風滿扁舟秋暑微。水光嵐色照征衣。出京旬日滯山館。還卜朗晴送客歸。
煙澹天澄秋氣微。風塵不着舊征衣。東都諸友如相問。飽看江山猶未歸。
客中送客暗愁微。秋入函山露滿衣。爲我願言相識士。狂生出國不知歸。

歸途口號

仙中有俗、仙未必仙、漱石猶是俗界之人矣、呵々、稍得仙趣。

得閑廿日去塵寰。囊裡無錢自識還。自稱仙人多俗累。黃金用盡出青山。
漫識讀書涕淚多。暫留山館拂愁魔。可憐一片功名念。亦被雲烟抹殺過。

峯の雲落ちて聲あり算水
東風吹くや山一ぱいの雲の影
雲の影山又山を這ひ回り

右、燕詩數首、呈

頼祭詞兄几下乞斧正

句々老練、然比之木屑録中詩、彼是天眞爛熳、此則小心翼翼、却輸一籌於彼何也。

弟金拜草

子規妄評

複製について

この『木屑録』は元來半紙判二つ折の紙を重ねて紙縫を以つて綴ぢ合はされたる極めて簡素なる稿本に有之、保存の便宜上後に帖の形に仕立て上げられたるものに御座候。然るにその際經師屋の不注意にて、稿本の天地が裁ち切られ候ため、幾多の箇所にて子規の朱書の一部も亦裁ち切られ候事に相成申候。その上その天地を薄く笹縁にて包み候ため、既に一部分裁ち切られたる子規の朱書は、一層深く掩ひ隠され、爲に文意不明の箇所さへ幾所にも生じ申候次第に御座候。今般複製に際しては、せめてその笹縁を剝がしたる上にて、裁ち残されたる部分だけでも完全に印刷致し度、専門の人人に色色相談致候へども、朱は水に溶け易きため、笹縁を剝がすに必要な水は、笹縁を剝がすとともに朱書の文字を消失せしむべく、従つてこの儘印刷するより外に致し方もなしとの事にて、不得已、子規の朱書は笹縁に掩はれざる部分のみを印刷する事に取り極め申候。此儀小生にとつても遺憾千萬には候へども、右の事情故、何とも致し方無之切に御諒承の程願上候。

次に『函山雜咏』と題する五言律以下の原稿二枚は、實は『木屑録』中のものにては無之、原稿第一枚の表右肩に記され居候通り、『木屑録』脱稿の一年後明治二十三年九月の作にかかるとも



のに御座候。然るにこの原稿は『木屑録』に添へて一帖に仕立てられ居候爲め、係りの者の不注意にて、『木屑録』とともに製版、『木屑録』とともに印刷に附せられ候次第に御座候。監督不行届にて甚だ不體裁を極め候事寔に申譯もなき儀に御座候。然しこの原稿は、現存する漱石先生の作品の原稿の内にて、二番に古い原稿に有之候由、殊に發句の方から言へば、漱石先生が子規先生に對して斧正を乞はれたる、最初の句稿に有之候由、そのうへ子規先生の評語中には、『木屑録』に觸れられたる箇所も有之、かたがたこの機會に『木屑録』とともに複製致置候方、或は反つて好都合なるべくやと存じ、敢て削除せず、そのまま複製致候事に取り極め申候。是亦切に御諒承の程奉願上候

昭和七年十二月

岩波茂雄



